

Ai研 NewsLetter No.5

相澤病院臨床研修センターニュース

2010年11月9日

研修医諸兄に相澤病院医学雑誌への論文投稿を推奨していますが、是非2年間に1編の論文を書いていただきたいものです。

最新号である相澤病院医学雑誌第8巻の巻頭言は相澤孝夫理事長によって書かれていますが、これは素晴らしい内容です。とりわけ一般に理事長、院長の書く記事は、病院経営や医療費のことに偏りがちですが、これほど感銘を受けた巻頭言は今までにありません。

この巻頭言では、自分の頭の中にあるドロドロとしたマグマの様な考えを整理して発表することの大切さ、その過程の中で自分の考えの矛盾点を修正して一貫性のある論文とすることの重要性が書かれています。

自分の中にもやもやと湧いてきたものが、ある概念(Concept)となる過程を概念化(Conceptualization)といいます。この時点ではまだ言語化されていません。この概念(Concept)が、自分にも他人にも明確に理解されるようになるためには、言語媒体による表現が必要となります。科学における言語媒体は、現在では日本語か英語が一般的です。科学的表現が出来る言語としては英語の方が、より適しているといわれています。例えば、源氏物語に使われた日本語で医学論文を執筆することは難しいでしょう。つまり、日本語を使っても、主語、述語が明確な文章を作ることが必要なのです。相澤孝夫先生がいうのは、自分の中の概念が、文章化する過程で、その内容の矛盾点、一貫性の不備に気づくことができ、それを修正する中で、自分の論理構成能力の向上を図ることが出来ることを強調していると思われます。あるいはその過程で、私が「Ai研NewsLetter④」の中で述べたようにセレンディピティ(serendipity)の能力を発揮して画期的な発見をするようになるかも知れません。

日常の医療のなかで遭遇した、ドロドロしたもの、もやもやしたものをそのままにしておいても、必ず同じことが長い医療者としての人生の中で繰り返し経験するものです。一度はつきりと概念化し、文章化して整理しておくことは自分の進歩にも通じるのではないのでしょうか。また、現実にはもやもやしたものが必ずあるので、それに気づく努力も大切なことのように思います。

是非この巻頭言をもう一度読んで論文を書く重要性を認識してみてください。

臨床研修センター長
小林 茂昭

(相澤病院医学雑誌第8巻より抜粋)

巻頭言

社会医療法人財団慈泉会理事長 相澤 孝夫

大学時代に阿部正和先生であったと思うが、自分の思考過程はできるだけ文字化・文章化しなさいと言われていたことがある。頭の中だけに存在していた思考というドロドロとした不安定なマグマを頭の外へ噴出させ、文字化することによって初めて自分の思考過程を整理し、確定することができる。まれには、思考したことがそのまま文章として頭の中に転写される天才（私の高校の同級生Sなど）が世の中には存在するようであるが、普通人にはできることではない。

文字・文章にしてみると自分がいかにあやふやな知識を基に思考をすすめていたかという事、思考をすすめるには知識が十分ではなかった事、思考の過程に矛盾があり、一貫性がなかった事などに気付かされる。頭の中で考えを巡らせていたのでは明確にならなかったことが、文字化・文章化したことで初めて認知できるようになったのである。

今回は多くの若き方々が投稿してくださった。心より感謝を申し上げたい。日常の仕事が忙しい中で投稿することには大変な苦勞があったことと思う。文章を書くだけでも大変な上に、内容を確かなものにするため、かなりの時間を他の論文や報告を調べることに費やしたはずである。このような努力を経た結果としての論文や症例報告を書き上げることにより、苦勞を遙かに凌駕する成長を若い皆さんは勝ち得たはずであり、それは必ず今後に繋がるものであると確信する。

若い諸君はその無限の可能性を伸ばし自分を成長させるために、面倒くさがらずにどしどし投稿してほしいと願うものである。雑誌編集委員会が投稿を依頼して漸く原稿が集まるのではなく、原稿が多すぎて断るぐらいになればと願うのは春の夢であろうか？

若いエネルギーが満載された相澤病院医学雑誌が益々充実する事を心から願い、巻頭言とする。